

「脱皮」せよ ～鈴木国際教養大学学長の講演から～

とっぷりと暮れた桜坂の歩道を、本高生が三々五々と家路に向かう。後ろ姿には今日一日勉強に、部活に頑張ったという満足感が漂っている。風に吹かれた落ち葉がかさかさと言を立てながら足下を滑り下りていく。

先日、本高同窓会長である猪股会長にご案内をいただいて、国際教養大学の鈴木典比古学長の講演を聴く機会があった。「グローバル社会で活躍する人材を育てる」という演題で、講演中はずっと引き込まれ、70分の時間があっという間に過ぎた。講演後はまるで、すばらしい音楽を聴いた後のような清々しい気持ちに浸りながら、講演中に湧き上がったインスピレーションやいくつかの想念を反芻していた。

鈴木学長は、英語と極めて不規則な形で出会った。初めて英語を学ぶことになる中学校1年時に、気管支の病気で半年間登校できず、2学期に学校に行ったものの英語はちんぷんかんぷんで、全く分からなかった。そこで鈴木少年がとった勉強法は、「やみくもに暗記」することだった。単語もスペルも丸暗記し、最初は何が何だか分からなかったが、継続するうちに文の意味や構造が理解できるようになった。中2から高校にかけても教科書を丸暗記した。



その後、一橋大学へ進み、アメリカの大学に留学し、アメリカの大学院生を相手に講座をもつことになるが、圧倒的な英語力の違いや文化の違いに悪戦苦闘、七転八倒しながらも、目の前の課題を一つ一つ乗り越えていった。

学長の講演を貫いていたのは「脱皮」というキーワードだ。夏目漱石や自分の教え子達の生き方にも触れながら、グローバル社会で活躍する人材とは、辛い経験に怯まずに、それをどうにか我慢して乗り越えて、自らの道を開いていく強い「個」を確立する力をもつことであり、それが「脱皮」するということである、と力説された。例えば学長の英語との格闘は「脱皮」を促す契機になったはずだ。

自分とは何か、自分は何を為すべきか。答えを求め、懊悩し、それでも格闘することをやめない。にっちもさっちもいかない、孤立無援のように思われる状況でも、自分なりに戦える武器を手にとって立ち向かう。そうする中で、「つるはしが鉾脈にかちりと突き当たる」のである。

講演を聴きながら考えた。本高生にとって、「脱皮」するとはどういうことか。3年生達は今まさに、受験勉強の総仕上げとして悪戦苦闘の只中であろう。1、2年生もそれぞれの課題と懸命に向き合っているだろう。辛い状況の中で、自分を抑圧しているものを突破していく力を獲得していく。それが「脱皮」ということだろう。

自分は何のために、今こうして苦しい状況と闘っているのか。それは、とりもなおさず自分は何のために生きるのか、なぜ学ぶのかという問いと直接に結びついている。

脱皮せよ、本高生。困難の中でこそ個の力が付く。苦しいということは、成長しているということだ。そこを乗り越えることで、個の力、人間力が鍛えられる。そして、学問の翼を悠々と広げ、グローバル社会へ飛び立つことだ。